

疑似餌^え

北西海岸インディアン

製作年 1980年

長さ 35.0 cm

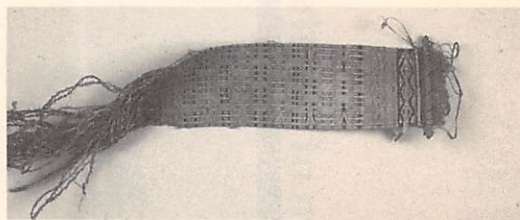
「鳥居龍藏のみた北方民族」について

平成6年2月1日から3月8日の日程で第7回特別展「鳥居龍藏のみた北方民族」を開催しました。1870（明治3）年、徳島市に生まれた鳥居龍藏は東アジアにおける民族学、自然人類学、考古学研究の開拓者、先覚者として位置づけられています。鳥居の東アジアにおける足跡は、南は台湾、西南中国から北は千島列島、サハリン、東部シベリアに至る広大な地域におよんでいます。北方地域については、1899（明治32）年の千島列島調査をはじめ、サハリン、アムール川流域を含む東部シベリア、中国東北部、モンゴル地域が含まれ、鳥居の行ったこれらの北東アジアにおける民族学的調査は今日なお重要な視点、情報を与えています。今回の特別展は、約90～70年前に収集・記録された鳥居の収集資料の展示をとおして、歴史のなかで失われてきた民族文化をみつめなおそうと企画されたものです。

展示内容は国立民族学博物館収蔵の鳥居収集資料140点、東京大学総合研究資料館収蔵の鳥居が撮影した千島アイヌの写真5点を中心に、鳥居の肖像写真、またサハリンと東部シベリアの現代の風景や民族の生活情景写真、地図・文字パネルを加え、資料の収集地域に従って、1)千島列島、2)サハリン、3)シベリア・アムール川流域、4)モンゴル・中国の4つのコーナーに分けた構成としました。以下にそのコーナー別に内容を紹介します。

千島列島

鳥居龍藏は1899（明治32）年、東京帝国大学から千島列島の調査を命じられ、軍艦武蔵に同乗して千島に赴いた。かつてシュムシュ、パラムシル、ラショワの各島に在住していた千島アイヌの人びとは、1884（明治17）年に根室に近いシコタン島に強制的に移住させられていた。鳥居はウルップ、パラムシル、シュムシュなどの島々で考古学的調査を行った後、シコタン島に約1ヵ月滞在して千島アイヌの言語や文化を調査し、同時に民族資料の収集も行った。



千島アイヌの帯（未完成品）

このコーナーではシコタン島採集の千島アイヌの衣食住、精神文化などにかかわる資料45点を展示し、あわせて鳥居撮影の写真を展示した。千島アイヌの文化は他の地域のアイヌ文化と異なった要素がみられ、言語にも特徴があるが、竪穴住居に住み、土器や石器を使用していたのはそう遠くない時代であった。展示資料のなかでも、削り掛けや礼冠など北海道アイヌと共通する要素も少なくないが、ハマニンニクで編んだ精緻な容器類や仮面の存在、一對の柁木を前後で結縛したカンジキ、針入れ（針刺し）、弓錐式発火具などはカムチャツカ半島とのつながりを示す資料であるし、船の模型は定住的集落を形成していた各村（各島）独特の印を示すものである。また、板状の暦や靴型などロシア人の影響を示す資料も含まれていた。

サハリン

鳥居のサハリン調査は2回行われており、最初の調査は1911（明治44）年7月から8月にかけて行われ、南サハリンのポロナイ川流域におけるニブフ、ウイлтаの調査であった。さらに、鳥居は1921（大正10）年、アムール川下流域の調査とともに北サハリンの調査を行った。西海岸のアレクサンドルフスクから内陸部に入りツイミ川を下って東海岸に達し、再び同じルートをたどって帰還している。この間、約2週間と短期間であったが、ニブフ、ウイлтаの集落において形質人類学的調査、民族学的調査を実施するとともに、比較的まとまった民族資料を収集している。その大部分は東海岸で収集され、約3分の2はニブフ、約3分の1がウイлтаの資料である。

このコーナーに展示された32点もおおよそこの割合で、白樺樹皮製容器、帽子、手斧、靴、袋・カバン類、煙草入れ、ナイフ、揺籃など日常的な

生活にかかわる資料と、胡弓、また匙や木鉢などの儀礼用食器等、精神文化を反映した資料である。これら鳥居の収集したもの以外に北サハリンのコレクションは日本国内にまとまったものがなく、千島アイヌの資料とともに貴重なものである。

シベリア・アムール川流域

鳥居はアムール川流域を含むシベリアの調査を3回行っているが、資料収集にかかわる調査は第1回、2回の調査であった。第1回目は1919(大正8)年6月から12月にかけて行われ、各地で博物館における調査を行うとともに各民族の集落でも調査をしている。バイカル湖から中国東北部の北部にいたる地域の数ヵ所でオロチョン、エヴェンキ、ソロンなど西部のツングース系民族の調査後、アムール川流域に転じて、主として下流域のニコライエフスク周辺でニプフ、ネギダールの調査を、中流域のハバロフスク周辺でナーナイの調査を行った。第2回目は先にあげた1921年の北サハリンの調査と同じ時期に短期間、アムール川下流地域のキジ湖、ニコライエフスク、チール周辺でニプフの調査を行っている。これらの調査のなかで資料収集は主として1回目の調査で行われている。

このコーナーの展示資料は38点で、西部地域のブリヤートの小刀、エヴェンキのカバン、オロチョンの白樺樹皮製容器などを含むが、アムール川流域で収集されたニプフ、ナーナイ、ネギダールの資料が中心であった。なかでも11点の精緻なつくりの白樺樹皮製容器にみられるようにアムール川流域の民族文化を比較する上でも興味深く、また、ニプフのまないた、チョウザメを象った木製彫刻、耳覆い、揺籃などもサハリン・ニプフの文化と比較する上で興味ある資料である。

中国東北部・モンゴル

中国東北部は鳥居龍藏の生涯で最も重要な地域であり、この地域の歴史考古学的研究をつうじてライフワークともいえるべき遼代の考古学的研究へと学問的関心を高めていった。1895(明治28)年

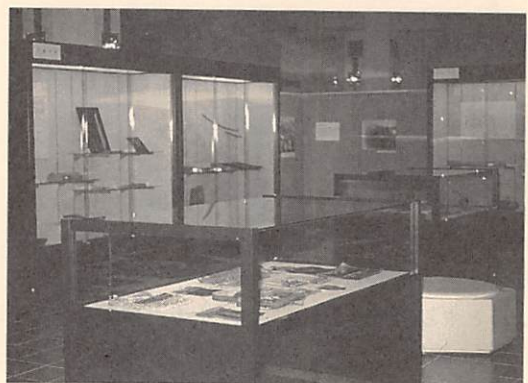
の遼東半島の調査を皮切りに、以後1940年にかけて、その多くは家族をともない満州、蒙古地域を精力的に調査している。

このコーナーには25点が展示され、一閑張り技法でつくられた水入れ、フェルトや布製の袋類、耳当てのついた円錐形の帽子、フェルトあるいは皮革製の靴、刺繍をともなう布製の煙草入れや名刺入れなど現在の中国内蒙古自治区で採集された資料が多く含まれている。他にモンゴルおよび中国吉林省・遼寧省で採集された資料も若干含まれ、吉林省で収集された揺籃とシャマン用太鼓は、鳥居の調査歴から考えて、1911(明治44)年の第1回朝鮮半島調査の際に収集されたと思われる。

近年、鳥居龍藏の業績に対して再び関心が高まってきました。昨年は鳥居の没後40周年ということもあり、国立民族学博物館と徳島県立博物館で相次いで鳥居の収集資料や撮影した写真を中心とした企画展、特別展が開催されました。このような機運のなかで北海道で鳥居の収集資料を公開できたことは大変意義深く、さまざまな反響から、この展示をとおして鳥居龍藏博士の業績ならびに北方諸民族の文化に対する理解と関心が深められたことを感じています。

本特別展の開催にあたり協力をいただきました、国立民族学博物館、東京大学総合研究資料館、鳥居龍次郎氏、大塚和義氏に深く感謝申し上げます。

(学芸課 渡部 裕)



鳥居龍藏 一人と研究一

講師／国立民族学博物館教授 大塚 和義 氏

近年、鳥居龍藏の東アジアにおける考古学、自然人類学、民族学的業績に対し改めて大きな関心が寄せられてきています。2月13日の講演会は、第7回特別展「鳥居龍藏のみた北方民族」の開催を機に、国立民族学博物館の大塚和義氏に「鳥居龍藏一人と研究」と題して、サハリン、東部シベリアなど北方地域における鳥居龍藏の調査研究の意義やその足跡について、講師の豊富な調査体験をまじえてお話しいただきました。以下にその概要を報告します。

鳥居龍藏の原点

鳥居龍藏は第二次世界大戦後の一時期、あまり評価されなかった。鳥居龍藏の足跡をたどると、フィールドワーカーとしての原点は千島アイヌの調査にあるのではないかと、千島アイヌの人たちに対する同情あるいは無力感をもったことが契機となっているのではないかと考えている。国内における民俗調査を行ったものの、鳥居はある時点から日本を外からみるという視点、日本民族の形成を周辺の諸民族の文化をとおして考えるということを一貫して行ってきた。揺れ動く時代状況のなかで貪欲なまで行った調査には、自由な目で、同じ目線で民族をみつめる姿勢が終始貫かれている。やがて、中央中心の歴史認識から自由に歴史をみようとし、さらに考古学と民族学をむすびつけようとした結果、鳥居は強大な中国文化の周辺に成立した遼代文化の研究に没頭することになる。

調査の足跡

鳥居龍藏は目にうつるものは可能な限り集める姿勢をもち、それは完成品だけでなく、さまざまな素材や編みかけの資料を集めたことにも現れている。第1回のシベリア調査(1919年)は緊迫した国際情勢のなかで実施されたが、このことも鳥居が生涯もち続けた、学問的関心・疑問を解決しようとする学問至上主義のあらわれと解釈できる。



当時の状況を調査していくと、日ソ両軍による軍事行動が少数民族の人びとに及ぼした悲劇がしいにあらかになってきている。

ここ数十年、サハリンやシベリアの調査の機会に鳥居の足跡をたどっているが、現代の移動手段をもってしても、まだその全てをたどれたわけではない。また、このような広大な地域にあって、鳥居は夫妻で調査を行う機会が多かった。現在、夫妻で調査を行う民族学者が多く、このことは人間社会が男女で構成されていることから、さまざまな調査利点があることはあきらかである。

鳥居龍藏の学問

厳しい自然環境の北東アジア地域を鳥居は、あるときは船、あるときは馬車で移動し、個人的な興味を学問まで昇華させた。そうして外側から新しい日本民族の形成を考えた。鳥居は多くの著作を残しているが、しかし当時の時代状況のなかで膨大な未発表のものが残されている。このことから、鳥居龍藏の学問には語り尽くせない大きなものがあることを理解できるのではないかと。

スライド写真

講演では、サハリン、シベリアなどで写された多くのスライドを用いて鳥居の目にうつったであろう各地の風景や動物などについて、さらに、開発による自然破壊の状況などの現状についても触れていただきました。

オホーツク文化をめぐる東北アジアの諸問題

講師／北海道大学助手 天野 哲也 氏

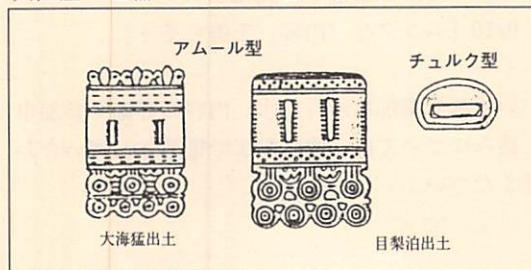
2月27日には、平成5年度最後の講座が開かれました。以下に概要を紹介します。

6世紀頃サハリンに成立したオホーツク文化は、後に北海道に広がり、11～12世紀頃には擦文文化の影響を受けてかなり変質したと考えられている。南に擦文と本州文化、北はサハリンや大陸との関係があったが、今日は北側を中心に、時代と地域によりどのような交渉があったかを話したい。

同じ頃の大陸は、文献上は韃靼、考古学上ではバクローフカ文化の時代であった。オホーツク文化では、鉄器や青銅製品は自給できないため、大事な道具でありながら周辺諸民族に供給を仰がねばならず、そのことを考古学的に論証したい。

(スライドを用い、北海道～サハリン～沿海地方～アムール地方の遺跡について、地域差を指摘しながら、両文化の特徴を紹介)

なかでも特に帯飾りに注目しているのだが、これには2タイプがあり、方形をしたアムール型と呼ばれるものは古いタイプの穴の二つあいたもの(二孔式と呼ぶことにする)と新しい三孔式のものがある。もう一つは、楕円形をしたチュルク型と呼ばれる飾りである。沿海地方の出土品はアムール地方のものとは様相が異なり、チュルク型は多数見つかっているのに、現在までアムール型の帯飾りは2点しか出ていないなど、はっきりとした分布域のあったことが読み取れる。北日本の日本海側では、沿海地方との関わりが大いにあったと考えられ、例えば本道でも余市町大川遺跡で大陸産の土器やチュルク型の帯飾りが出ている。



一方、オホーツク文化と接触があったのは、沿海地方ではなく、北回り・サハリン経由のアムール地方でなかったかと考えられる。

特にアムール川に注ぎ込む松花江流域の大海猛・査里巴といった遺跡には、枝幸町目梨泊遺跡や網走市のモヨロ貝塚から出土しているものとよく似たアムール型二孔式の帯飾りが多く、ここが製作地に近いのではないかと注目している。

オホーツク文化よりやや新しい10～12世紀頃のコルサコフ遺跡の事例から、帯飾りの性格について考えてみたい。ここではアムール型は一つの墓から1個だけ出土することが圧倒的に多いのに対し、チュルク型は個数に偏りが少ない。出土状況は、アムール型は胴体付近にあるチュルク型とは離れて頭のあたりに1個だけ置かれていることがある。また、アムール型と武器(鉄鏃)が同じ墓から出るのは約30%とその相関は低いが、チュルク型は武器と共伴する例が50%くらいで、ほとんどが男性の持ち物だったと考えられる。これらから、アムール型は本来埋葬された人が持っていた物ではなく、後から手向けられたのではないと思う。そして、チュルク型は階層制度を表すもので、階級が上がるごとに一つずつ与えられるというように用いられていたのではないかと考えられる。

一方、8～9世紀頃のナイフェリト、大海猛、査里巴の事例から、古い時代にはアムール型と武器とが相関関係にある。つまり北海道の目梨泊やモヨロ貝塚のものは、その時代に鉾などの武器と一緒に持ち込まれたものであろう。ただし、武器類は限られた遺跡にしか見られないため、オホーツク文化の中には政治・経済的な力関係が存在しており、両遺跡を残した集団は力があったために、本州の東北地方で作られていた藤手刀を含め、南北から「物」を集めることができたと考えられる。



網走管内各博物館の活動を地域で連携して進めるとともに、職員の資質の向上を図る研修会として、国学院大学教授の加藤晋平氏の講演が開催されました。以下に「マンモスハンターはいなかった～考古学研究におけるタフォミーの重要性～」の概要を紹介します。

網走管内博物館連絡協議会研修会

2.25 於：北見

講師はかつて、シベリアの旧石器時代の人びとはマンモスを狩猟して暮らし、一部は日本にも渡ってきたと考えていたが、近年は考古学研究に多様なアプローチの方法が導入され、マンモス・ハンターはいなかったと考えるようになった。特に「考古埋蔵学」と訳されるタフォミーは、動物が如何にして死に、遺体がどのように埋積し、かつ土中での変化を経てどう発掘されるかまでの過程に関する研究で、重要な示唆を与えてくれた。

例えば、縄文貝塚のシカやイノシシの骨のうち、顎骨の数より他の部位が少ないのは縄文人の分配・消費・放棄などの行動に因るものだと解釈されてきたが、実は歯痕などからイヌによって硬い顎骨以外は食べられたとの見方ができる。また、周口店の洞穴から出土した多量の動物化石は、北京原人が狩猟して食べたものと考えられてきたが、ビンフォード氏はハイエナの歯痕の上に石器の傷があることなどから、人類は腐肉を漁っただけで、原人段階では狩猟活動は存在しないとされた。また、後期旧石器時代のロシアのメジリチ遺跡はマンモスの骨を用いた住居で有名だが、自然に堆積しているマンモス化石の年齢構成や、その骨の部位と住居に使われた部位とが相互補完の関係にあることから、自然死したマンモスの骨を人類が拾ってきて持ち込んだ可能性が高い。

民族誌からも、アフリカのピグミーは銃の使用まで若齢の象しか狩猟できなかったことが知られており、様々な視点から人類と大型獣狩猟の関係を再検討する必要がある。(学芸課 齋藤玲子)

平成6年度前期の行事

- ・ 5/22 第1回講習会
/29 「ワークショップ1
インディアンの子珠ベルトを作る」
講師 青柳文吉・笹倉いる美(当館学芸員)
- ・ 6/5 第2回講習会
/12 「ワークショップ2
サミのひもを織る」
講師 青柳文吉・笹倉いる美(当館学芸員)
- ・ 7/9 第3回講習会
「とんぼ玉を作ろう」
講師 木村正道氏(ジュウリーデザイナー)
- ・ 7/26 ~8/28 第8回特別展
「あそび・ゲーム・おもちゃ」
- * 特別展は別途観覧料を申し受けます
- ・ 7/31 第1回講演会
「ゲームの起源をたどる」
講師 増川宏一氏(遊戯史研究家)
- ・ 9/11 第1回講座
「オーロラの下でくらす
ーカナダ・イヌイトの生活と自然」
講師 佐々木 亨(当館学芸員)

*7/9(土)の講習会は午後1時30分から、その他の講演会・講座・講習会は午後2時から、当館講堂にて開催します。

〔土曜セミナー〕小中学生を対象に第2土曜日の午前10時20分から体験学習セミナーを開催します。

- ・ 5/14 「インディアンの仮面をつくろう」
- ・ 6/11 「野の草花に親しもう」
- ・ 7/9 「とんぼ玉作りに挑戦！」
- ・ 9/10 「ムックリ(口琴)を鳴らそう」

いずれも参加は無料です。内容の詳細や参加申し込みについては、博物館まで電話でお問い合わせください。

平成6年度後期の行事

- ・10/23 第2回講座
「ロシアからみたオホーツク文化」
講師 山浦 清 氏 (立教大学)
 - ・11/8~10 第9回シンポジウム
「ツンドラ地域における人と文化」
 - ・11/20 第4回講習会
「サラニブをつくろう」
講師 津田命子氏 (北海道ウタリ協会)
 - ・12/8 第3回講座
「フォーラム・博物館と地域研究
「アイヌ文化の成立を考える」」
講師 菊池徹夫氏 (早稲田大学)
 - ほか
 - ・1/22 第4回講座
「“みやげ”の文化人類学
—北方民族の工芸と観光—」
講師 齋藤玲子 (当館学芸員)
 - ・2/7~3/14 第9回特別展
「北方民族の船 北の海をすすめ」
 - ・2/12 第2回講演会
「イタオマチを復元する」
講師 秋辺得平氏 (北海道ウタリ協会)
 - ・2/19 第5回講習会
/26「ワークショップ3 イン
ディアン・のビーズベルト」
講師 青柳文吉・笹倉いる美
(当館学芸員)
 - ・3/12 第5回講座
「北方の漁撈文化—氷下漁—」
講師 渡部 裕 (当館学芸課長)
- 〔土曜セミナー〕
- ・10/8 「探検！北方民族博物館」
 - ・11/12 「火おこし体験」
 - ・12/10 「あやとりは世界の遊び」

時間や開催場所等の詳細については、改めておしらせします。

Q

漁撈具のなかに羽子板の羽根に似た北アメリカ北西海岸インディアンの“疑似餌”という資料がありますが、どのように使われたのでしょうか。

(表紙写真)

A 北アメリカの東南アラスカからオレゴン州にいたる太平洋沿岸に居住してきた北西海岸インディアンは、南部を除くと多くの島々やフィヨルド状の入江に富んだ複雑な地形のなかで言語や伝統文化の異なる多くの集団に分かれていました。彼らは海獣・陸獣の狩猟や植物採集も行いますが、主として、豊富なサケ類やニシンなどの回遊魚、オヒョウやタラ類、貝類などの漁撈資源に依存し、さまざまな漁法や漁撈具が発達していました。

なかでも、この羽子板またはバドミントンの羽根に似た木製の疑似餌は彼らの特筆すべき漁撈具の一つです。棒状に削った本体に2、3枚の羽根状の部品が取り付けられた疑似餌は、船から長い棒を利用して海中に押し沈めて棒をはずすと、頭部を上にしながら2~3枚の羽根によって、ゆっくりと回転しながら海面まで浮上します。アイナメやギンダラといった魚種は、この浮上する疑似餌を餌としてあるいは好奇心から追って水面近くまできたところを槍や鉆、すくい網で捕らえられるのです。この道具は北西海岸インディアンのなかでも少なくとも、クワキュートル、ヌートカ、コースト・サリッシュに知られています。

(学芸課 渡部 裕)

『研究紀要 第3号』刊行

「北海道立北方民族博物館研究紀要第3号」が刊行されました。内容は次のとおりです。

大林 太良

「アイヌ神話における文化英雄」
池上 二良

「ウイルト語の南・北方言の相違点」

沖野 慎二

「アイヌ民族に“うなり板”は実在したか? —N.G. マンロー「アイヌ: 信仰と儀礼」のある記述をめぐって—」

渡部 裕

「北東アジアにおける海獣狩猟
(I) 海獣狩猟の技術」

青柳 文吉

「湧別町川西遺跡発掘調査概報
(2)」

佐々木 亨

「日本人によるオロチョンに関する民族学的報告の比較研究—「鄂倫春の實相」を中心に—」

齋藤 玲子

「北方民族文化研究における観光人類学的視点(1)—江戸~大正期におけるアイヌの場合—」

笹倉いる美

「資料解説 北西海岸インディアンの意匠」

佐々木 亨・笹倉いる美

「Norlist・Museland 1993

—北方文化研究・博物館学研究
データベース—」

寄贈資料紹介

○インディアンの工芸品

インディアンの銀細工など4点の工芸品が、神奈川県藤沢市の遠藤欣一郎氏から寄贈されました。

執筆者ならびに出版社から

贈呈を受けた書籍 (2月～3月)

大林太良ほか編『世界神話事典』角川書店 1994

主な来館者

- 2/23 竹内透氏 (北海道開発事務次官)
3/3 宮本信生氏 (北海道担当特命全権大使)
3/3 浅田英祺氏 (北海道総合研究所長・旭川大学経済学部講師)
3/4 小澤紘氏 (栃木県立博物館総務課長)、ホアン・ミン・ロイ氏 (同館研修生)
3/8 一家正己氏 (北海道開発局官房長)
3/9 菊池健策氏 (福島県立博物館主任学芸員)、森幸彦氏、酒井耕造氏 (同館副主任学芸員)
3/16 荒田昌典氏 (遠野市立博物館係長)、小笠原晋氏 (同館学芸員)

観覧者動向 2月～3月

	常設展示	特別展示
2月	2,429名	1,132名
3月	3,118名	367名

第7回特別展の総観覧者数は1,499名でした。

みんぞく

こうこ

はくぶつかん

in Hokkaido (2月～3月)

- 2/9 リレハンメル五輪をサミ民族の伝統アビールの場に・開会式出

場や文化展で料理や民謡紹介の予定/D

- 2/10 斜里町立知床博物館の流水情報が好評・ファックスで町内に配布/Y
2/10 北海道ウタリ協会主催「第27回北海道アイヌ民芸品コンクール」札幌ではじまる/D
2/14 道内12か所のアイヌ語教室に共通テキスト・北海道の補助事業で道ウタリ協会が作成/D
2/17 北極圏から「環境授業」・パソコン利用で世界各国の子供の疑問に回答/D(タ)
2/22 アイヌ文化の生き字引・丹葉節郎さん死去/Y他
3/1 「ハルニレのうた・アイヌ民族と教育」第4部、/12まで10回シリーズ/D(タ)
3/3 士別市立博物館に「北方圏・北極圏資料室」がオープン・和泉雅子さんの寄贈資料を常設展示/A S
3/4 白老町のアイヌ民族博物館で4年ぶりにイヨマンテ再現/M他
3/15 札幌の木崎さんらニブフなどの協力により犬ぞりで間宮海峡横断・ロシア人以外では初/D(タ)
3/15 余市町大川遺跡出土9世紀頃の土師器に「夷」の異体字・羽根国の出先があった証拠/D, Y
3/21 ヤイユーカラの森主催、阿寒でアイヌ民族のシカ追い込み猟体験・来年は捕獲を/M, D
3/28 カムイドラノ協会主催「アイヌ語弁論大会」弟子屈で5年ぶりに開催/D, Y
3/29 穂別町立博物館が“化石情報”を世界と交換・海外の博物館とネットワーク作り開始/D(タ)
* A S 朝日新聞 (道東北網版)
D 北海道新聞 (オホーツク版)
M 毎日新聞 (道東道北版)

Y 読売新聞 (北網版)

複数紙掲載の場合は、扱いの大きい方を紹介しています。

◇職員の異動◇

- 転出 (4月1日付)
管理課主事 山上 和弘
(石狩教育局企画管理課へ)
転入 (4月1日付)
管理課主事 土井 宏治
(根室教育局生涯学習課から)
退職 (3月10日付)
管理課主任 小寺 忠男
退職 (4月30日付)
管理課長 田中 益三
採用 (4月1日付)
管理課主任 板垣 明男
(網走市役所から)
採用 (5月1日付)
管理課長 歌川 靖雄
(北海道立社会教育総合センター管理部から)

編集後記

3/23付の地元紙のコラムに、当館友の会員に向けて発行しているニュースレターの中から、解説員が中心に執筆している『博物館こぼれ話』のことが取り上げられた。コラムの筆者は、「こぼれ話」を面白く読んでいるといい、いろいろなエピソードは「百万言を費やすより同館の状況をよく説明している」と書いている。そして最後に「ここには、専門家の学芸員とは違う目がある」と締めくくっている。

お褒めいただいて大変嬉しく思っているところだが、一方で学芸員の書いた文章が難しくなりすぎないようにとの、バランスのとれた編集を期待されているようにも感じている。(齋藤)